

# 産官学で拓く柏キャンパスタウン

## 柏の葉アーバンデザインセンター・オープン

text shiozaawa

**新**領域・北沢研究室（空間計画研究室）が中心となって推し進めている柏の葉キャンパスタウン構想は、アーバンデザインセンター開設によって大きな結節点を迎えた。自身も都市スタジオ受講生として本プロジェクトに関わる塩澤記者が、柏の活況を伝える。



新オープンUDCK 前で行き交り、「学生部隊」



左/オープニングセレモニー  
中/柏の葉キャンパスタウン大模型  
右/出店の番に動じる平林M1（左）、砂川M1

### 11月20日/ 柏の葉アーバンデザインセンター (UDCK) オープニングイベント

待望のUDC オープン、関係者や記者の方への内覧会が行われました。オープニングセレモニーとして、岩沙弘道氏（三井不動産代表取締役社長）、小宮山宏東京大学総長、本多晃柏市長、古在豊樹千葉大学学長によるテープカットが行われ、記念シンポジウムでは北沢教授をはじめ大和 裕幸氏（東京大学 新領域創成科学研究科 教授）、上野 武氏（千葉大学 キャンパス整備企画室 助教授）によって、オープニング展示の解説と、センターの構想についてのパネルディスカッション講演が行われました。盛大に、そして無事にオープンすることができたUDC。新聞各社にも取り上げられ、社会の関心も集まっています。

その裏では前日まで連日連夜、展示の作業に柏の葉を熱く走り回る学生部隊がありました。

### 11月25日/ 環境講演会 「東京の郊外：その形成過程と将来」 +都市スタジオ中間発表

環境講演会は今後、何度か行われていく予定ですが、その第一弾として、東京大学都市工学専工 大方潤一郎教授による講演会が行われました。

「東京の郊外：その形成過程と将来」ということで、歴史的に東京の郊外がどのように形成されてきたのか、東京圏の人口密度配置構造の動態と把握、予測、郊外は縮むか、広がるか…など、この柏の葉の未来を考える上でも避けては通れない問題を投げかけられ、非常に示唆に富む講演をしていただけました。都市スタジオを履修している学生達に限らず住民の方もお見えになっており、広くまちを考える舞台としてUDC が機能しはじめていることを実感できました。

10月に始まり、約1ヶ月半にわたって柏の葉の将来の構想を行ってきた都市スタジオ。その中間発表としてそれぞれ5グループがUDC で発表しました。

それぞれの班ごとにテーマや取り組み方など様々で、「実験都市」や「産業都市」、「農業都市」、「緑」や「公園」に着目した構想…。まだまだ未消化なところはあり、指導して下さった先生方からも多くの適切なご指摘がありましたが、北沢教授からは「予想以上に成果があった」との評価。今後さらに12月23日の第2回中間発表と1月末の最終提出に向けて構想・提案をつめていきます。

## 琉球の風に吹かれて

都市計画学会発表報告

D3 岡村 祐

**沖** 縄県知事選最終盤の11月18・19日、第41回都市計画学会学術研究論文発表会が南国沖縄・琉球大学（沖縄県西原町）で開催されました。都市デザイン研究室からは、野原卓助手、中島直人助手、そして、D3 岡村祐がそれぞれ発表しました。全体の投稿数および発表論文数は例年を上回り、大会としては大盛況であったとのこと。因みに、琉大キャンパスは、1970年代に現在地に移転したのですが、かつては沖縄戦で破壊された首里城跡にあったようです。（大学の移転後、首里城の復元整備が行われ、現在は世界遺産にも登録されています）

翻って、緑豊かなキャンパスから依然として蒸し暑さの残る沖縄のまちに出てみると、高台にある神社の鬱蒼とした社叢林や眺めのよい斜面に住宅と墓が混在している風景を望むことができます。また、通りを歩けば、あちこちで「シーサー」や「石敢當」などの魔除けに遭遇します。常に、（悪霊も含めて）神様や

祖先が身近にいることを感じられる都市空間が広がっているのです。神様によって授けられ、祖先が幾度の苦難を乗り越え長年にわたり築きあげてきた大地を守り、子孫へと受け継がなければならないという人々の意思を感じました。

懇親会の挨拶で、大西隆学会長が沖縄県の出生率の高さについて言及されました。その背景には、もちろん医療や福祉の充実があるのだと思いますが、このような沖縄の人々の神様や祖先に対する高い崇拝心や地域の伝統や文化への愛着心もその要因の一つになっているのではないかと思います。



陽当たりのよい斜面に住宅と墓が共存している

### 都市デザイン研究室メンバーによる発表論文題目の一覧 (内容は研究室HPを参照)

- 野原卓 「大規模臨海工業地帯における土地利用現況とその変容過程に関する研究」
- 中島直人 「昭和初期における日本保勝協会の活動に関する研究」
- 岡村祐・中島直人 「国会議事堂へのヴィスタの構想と形成の過程に関する研究」



坂を登っていくと神社とその社叢に行き当たる

# 小雪舞う喜多方、塾生修了 別れの季節・育て若い力

M1 横田 俊介  
(まちづくり塾塾長)

12月3日、今年度喜多方Pの締めを飾る「まちづくり講演会@大和川酒造・北方風土館」を開催。数百人は入る大きな蔵を舞台に、北沢教授講演～地域づくりの構想～、今年度2事業「景観WSーまちあるきMAPー」と「まちづくり塾」の成果発表を行った。当日は、福島県知事も(!)最初の挨拶までご参加頂いたほか、北沢教授から高校生への“まち塾提案に関する質問タイム”もあり、大変盛大な会となった。

閉会後の懇談会では、若者のまちづくり発想を聞き、幼い頃の体験を語る住民や、どうしたら若者に向けて蔵住まい喜多方を継ぐことができるのか…など様々な語らいが飛び交った。”若者が働く場所がない”と訴える人もいた。”蔵住まい”喜多方ではいま、若者が住まうまちへの世代伝承が問われている。講演会前日に開催した油屋蔵”まちづくり塾”修了式。生徒は目に涙を溜めていた。この生徒たちに伝承される”喜多方”に対し、私達院生がいまできることは？ 次年度に向けさらなる提案を行う段階に入っている。

修了証を手に、まちづくり塾第1期生4人



北沢教授と高校生たち、懇談会で談笑



# エレジー ホップ、ステップ…新宿哀歌 第3クールへの胎動

D1 中島 伸

奮闘を続ける新宿プロジェクトは第2クール終幕の兆しが見える中、年内さらに作業に加速をつけるため、中島助手号令の下、第3クール調査地となる新宿区柏木地区のまち歩きを11月26日(日)に敢行した。当日は若干の少雨を物ともせず、午前中から日没まで、メンバーにとって久しぶりとなるまち歩きが行われた。柏木地区はこれまでの調査作業を行った4地区とはまた異なる文脈、様々な空間の展開、場所の豊潤な語り一同満足の行くまち歩きであった。

今後の予定は、年内は第1、第2クールのおさらいとまとめを行い、新年から本格的に第3クールとなる柏木調査を行う予定。第2クールは夏季だったため、暑さとの闘いとなったが(体誌33号参照)、第3クールは冬季の調査となる。内に秘めた情熱の火を消さぬようにして、第3クールも望んでいく。寒さに立ち向かっていけるだけの経験と自信は既にこれまでの第1クール第2クールで蓄えたはず。その前にまずは今年の総仕上げ。



左上/区画整理街角  
右上/成子神社への参道

左下/  
神田川沿いの遊歩道  
右下/  
古い住宅の背後に超高層



編集後記

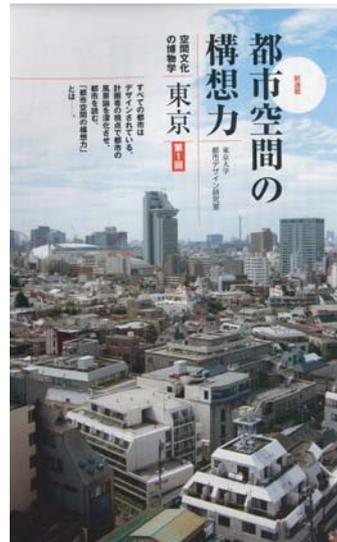
text\_bannai

屋敷林名残りのケヤキの大樹を眺めながら生産緑地のあいたを抜ける、最寄り駅への二〇分余のわが通学路。登校する小学生たちとすれ違って一日の英気を充填するまち。となることよりも、下校中の彼らを眩しく見やりながら傾きかけた陽光に向かって歩くまち、となることが多い。市のマスタープランをひもとくと、このまちに「恋のみち」という名がついていた。これだから、マスタープランは…と思ったが、以来、帰途の酔いに任せた畑への不行状は控えるようになった。

# 「都市空間の構想力」始動

text\_bannai

西村幸夫教授が長年にわたってあためてきた企画「都市空間の構想力」(本紙第19号参照)が、『季刊まちづくり』2007年1月号(今12月に発行)から堂々の連載スタートとなった。都市を丹念に歩き、細やかに眺めることによって、都市空間に織り込まれたさまざまな意図の積層を、都市空間自身が持つ「構想力」として読み取ること。都市デザイン研究室のまちあるきで常から意識されていることが、「空間文化の博物学」としてトピック毎に誌上展開される予定だ。連載第1回では、西村教授の序説に続いて、本郷界隈の各まちにおける「都市空間の構想力」が読み解かれた。昨年12月に実施された「ベルク本郷まちあるき」の総集編とも言うべき内容になっている。



連載の中表紙は、14号館からの本郷のまちの眺め。ベルク教授をして「時化のよう」と嘆かした市街地だが、西村イズムはここにも様々な物語の重層を覗き取る。

# 11/24研究室会議 いざ修論！高まる期待

今学期第2回目の研究室会議における発表者は、以下の通り。

M2 江口久美

歴史的ストックを有する公共的敷地を生かした都市づくりに関する研究—歴史的軸線を有する上野公園を対象として—

M2 早坂勝一

高級戸建住宅地の形成と新規居住者意識に関する研究

M2 三澤茂樹

屋外広告物による地域活性化に関する研究

M2 楊恵亘

台北市における再生された歴史的空間の持続可能性に関する研究

# 美化係からの挑戦状 大掃除が研究室を救う

先11月22日、前号マガジン社説を受けて、革命的有志数名により、研究室美化の部分的・試験的実施を断行した。今回のクリアランス対象は、9階院生室中央通路沿道であった。計画なきままに集積するトレベを選別の上処分し、美観を損ねるのみならず通風をも著しく阻害していた高層本棚を撤去した。併せて、共用「丹下机」上の書類堆積の根絶やプリンタ配置替え等によって、共用スペースの圧倒的拡充を実現した。

「お、キレイになったじゃん」という言葉が口をついて出てしまった諸君。我々都市デザイン学徒がもっとも忌避すべき「空間配置・空間利用への無関心」を自己批判し、「自分のプライベート・スペースには手をふれないで」式NIMBY主義を脱却して、我々の戦列に馳せ参じよ。積年の課題である研究室美化に向けて、小さなしかし偉大な一歩が刻まれた今、さらなる知と、そして何より体力の結集こそが求められている。ホウキを握り締めよ。年末一斉蜂起の日は近い。

11・24 中央通路拡張闘争の様様

